

Northern OWLS



2

1991/9
北海道立美術館
学芸員研究協議会

談輪

美術館における発券

監視業務について

美術館の運営は、来館者に対し、いかに心の豊かさを与えることができるかの一言につきるかもしれない。

私共、美術館行政を担当する職員にとって、作品もさることながら、それをとりまく環境が良くないと、いくら優秀な作品を展示しても、価値が半減し、来館者の心に残るものは、僅かではないかと思う。

日夜、学芸員は、来館者に対し、作品を通して、時代なり、人の生きざまを伝え、理解していただく心にかけている。又来館者の目につくところでは、カラーのクリップ或いは、カラーの画紙等を使用し、事務室では普通の事務用品を使用し、経費の節約に協力していることも見受けられ、いかにサービス業務というものは、相手の立場

発信

受信

各館便り

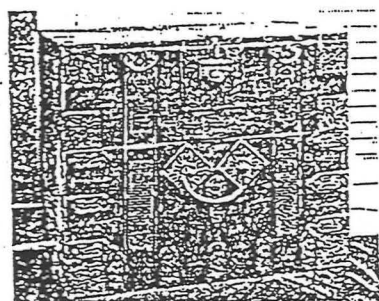
▼本年度第一回の収蔵作品選定評価協議会が八月二十日に行われ、函館を除く四館の購入作品三十点と近代美術館の寄贈作品五点が決定した。主な購入作品は、近美ライリー、ソトなどオブティカル・アート四点、ゴッテ、ハルドなどのスエーデン・ガラス八点等の計十八点。旭川・川越悟、戸谷成雄など、木の造形・五点等の計七点。帯広・コロロ、ミレーのエッチング、ミュシャ、スタンランのリトグラフ（大型ポスター）各一点の計四点。三岸・昨年の「パウハウスへの想い」の出品作、三岸のカラージュエリー二点。なお、函館は第二回の協議会で一括購入となる▼収蔵費の増額分一千万円は、効率的な収蔵を図るため四年間で各館に一千万円が増額されることになった。今年度は帯広、函館が各五百万円。▼帯広美術館の施設・設備の新機軸はコンピュータによる照明操作。扱いに慣れるまでは相当の苦労はあるが、いざれ機動力をおおいに発揮するだろう。また効果的な収納スペースの確保も参考となる。▼鹿追町に神田日勝記念館の開館準備室が設置された。室長は作品後見人の米山将治氏。「三世代交流学習館」「トリムセンター」の建設も計画され、三館はポロ（全天候型コミュニティロード）で結ばれる。空調設備の導入、学芸員の配置も実施要項に盛り込まれ、準備は軌道に乗っている。来年秋か再来年春のオープン予定。

（旭川美術館）

「コノゴロ旭美二流行ルモノ」は「民芸」に関する話題である。といっても、図録の原稿を分担し、柳宗悦の著作を読み耽った二人だけの話題である。別に仲間はそれにしているわけではないが、「民芸の美」展を担当しているという一人はカヤの外で、二人の話しを聞きながら合点のいかない顔をしている。さて、この民芸という言葉、現在では軽い意味で用いられているが、この言葉を造った柳宗悦の著作を読むと、本来は深い理想を包含するものであったことがわかる。しかし、柳の民芸理論には矛盾点も指摘されていて、民芸に正面から取り組むことの難しさをかんじている。

「民芸の美」展の成否は、民芸が本来持つ魅力とその意義が現代の観覧者にどれだけ理解してもらえるかという点にかかるといえる。現在、展覧会の準備は最大のヤマ場をむかえている。ここ二週間が勝負である。（元平 二宮）

（新明英仁）



民芸の美／朝鮮・衣裳櫃



美術館コンサート

（三岸美術館）

三岸美術館でもいくつかの普及活動を行っており、この夏は「たんけん美術館」、「美術館コンサート」、「ミニ・リサイタル」などが続いた。コンサート、リサイタルは今回でそれぞれ二十二回、十一回を数える。展示室は音楽会用に設計されたわけではないが、思いのほか音響効果は良いようで、先日は演奏会場として借りられないかと問い合わせもあったほどである。毎回約百名から二百名（多いときには三百名をこえたりする）の入館者があり好評であるが、ピアノや椅子を狭い館内に置き、照明を一部変えたりすると、作品の鑑賞には少し不便を生じる面もある。三岸の作品「オーケストラ」にちなんで始まったコンサートであり、音楽と美術をともに楽しんでもらえるようなものとして、展示ともあわせて今後も考えていきたい。また、そのほかの普及活動についても当館の特色を十分考えながら行っていきたいとおもう。

（地家光二）

（帯広美術館）

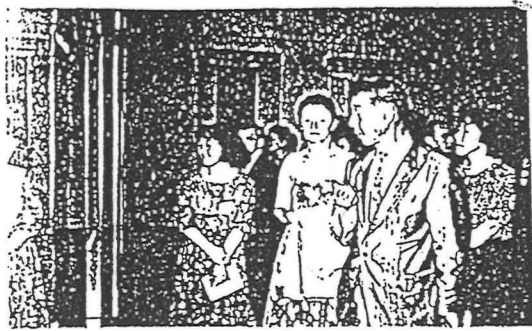
目前に迫った帯広美術館のオープン。九月二十一日の開館記念式典、翌日の一般公開に向けて館内は準備におおわらわ。記念式典は美術館前庭で午後一時から。モニメントの除幕式、開館記念展開会式、レセプションが引き続いて行われる。分刻みのスケジュール表をにらみ、館長以下スタッフは机上訓練に余念がない。

開館記念の「フランス19世紀絵画展」そして「新収蔵品展」は、十三日には展示作業が終了。館内では展示室だけが静けさを取り戻す。開館に先立つ十七日からは美術家、岡部昌生氏が市内各所で公開制作を行い、二百以上の巨大大版画を市民とともに制作する。一方、二百名を超えるボランティアは、図書室、売店、喫茶室で自主研修を毎日実施、さらに女子の制服組は発送作業の合間をぬって、オリエンテーションの解説準備に励んでいる。例年になく天候不順の帯広。はたして、この秋は十勝晴れとなるだろうか。（元平 二宮）

（寺嶋弘道）



美術館前景



前列中央・スーリエ館長

(五十嵐聡美)

七月半ばから始まった「スベイン絵画展」は、観覧者数が二万七千人を越えるという盛況ぶり、好評のうちに終了した。八月十八日の最終日には、スペインから展示技術員のロドリゲス氏、修復師のアスネル氏が来館、両氏と入れ替わるかたちで今度は、フランスのプザンソン美術館長スーリエ女史が、福岡波響の「夷酋列像」とともに函館入りした。

波響展は、開館時から暖めてきた企画であり、この度、開館5周年記念展として開催することになったのである。そして一般公開に先立つ九月二十五日、北海道立函館美術館開館五周年記念式典、および記念展開会式がおこなわれた。三百名を越す招待者が集まり、にぎやかな式典となった。中には、旧職員の間、懐かしい顔もあって、五年という歳月が過ぎたことを改めて感じさせられた。波響展では、新たな情報がいっつか寄せられており、波響研究の進展が期待される。



ミュージアム・スクール

(近代美術館)

開館して十四年目を数える今年、当館では、以前からの事業の企画内容に新たな試みが導入された。まず、「ミュージアム・スクール」である。これは、昨年までのサマー・ミュージアムの発展型ともいえるべき子ども向けの事業であるが、内容はまったく一新された。特別展形式を廃し、「コレクション・ギャラリー」の展示内容を中心とした各種のプログラム展開という新機軸によって実施されたのである。詳しい内容については、「ろびい」誌上の報告をご覧いただきたいが、参加者の評判は上々であった。

この構想のベースには、子ども向けの美術館教育の原点へのこだわりがあったのはいうまでもないが、これにより、冬の「子どもと親の美術館」の実施方針にも再検討が加えられるのは必至である。また、「世界現代ガラス展」の構成やカタログの編集内容も大きく変わったことも、すでにおお付きかと思う。「継続は力なり」ではあろうが、そこに常に新たな発想の風を吹きこまなければならぬ、というのが少々おおげさかもしれないが、私の実感である。

(大熊敏之)

「語采」

メセナ Mécénat

企業による芸術・文化支援が話題になっている。「メセナ」とよばれ、フランス語で「文芸庇護」を意味する。ローマの武帝で文人を庇護したマエケナスの名に由来する。アメリカには「フィランソロピー」という言葉があり、これは個人や団体の奉仕・慈善活動のことを指す。今日、「メセナ」が話題となっているのは、経済大国日本の力ネからココロへの転換を背景に企業が公益活動や文化事業に眼を向け始めたからだ。企業のイメージアップをねらった新戦略ともいえるだろう。昨年二月に発足した企業メセナ協議会は、「メセナ」活動の普及と環境整備を組織的に行う団体である。企業（メセナ）の対象として最近目立つのは美術館、音楽会などのイベントや国際交流である。美術館では展覧会の経費が年々膨らんでいくなかで、ますます企業の経済的援助が求められていくというのが現状であろう。運営費の一部を企業からの寄付でまかなう財政システムや特定の展覧会に対する企業からの助成といったかたちで「メセナ」はしだいに浸透してきている。近畿や函館ではすでに展覧会や企業が設立した文化財団から助成を受けている。今のところ、数は少ないが、今後増えていくと思われる。公共の機関と企業では同じ文化活動でもその性格は違う。美術館側でもそれぞれの館の性格に応じて「メセナ」の位置づけを考えていく必要があるだろう。

(浅川 泰)

考えの小窓

「研究」小考 ②

前号で国立民族学博物館の恵まれた環境について紹介した。そして、恵まれてはいるがゆえに上げねばならぬ厳しい実績のノルマについても触れた。ところで、彼らの専門分野が脚光を浴びるようになったのはレブイストロース以来といっている。周知のように彼は、未開文化の親族論の目に見えない「構造」をつかみだすことによって、現代思想におおきな転換点をもたらした。机上の文献資料に頼らず、果敢に「現地」に赴き、必要とあらばその地の人々と生活を共にするフィールド・ワークが盛んになった

のも、それ以来といっている。彼らの研究活動の基礎を成すものといっても過言ではない。我々も館外に出て作品等に接し、資料を探しだし、時には作家に会って調査を積み重ねる。フィールド・ワークといえないかもしれないが、実地調査には変わりない。ところで、フィールド・ワークを「机上の研究」と相対的に位置づけたとしたら、我々は館内にありながら実に貴重なフィールドをもっていることになる。その代表的な場として展示室をあげておきたい。この床と壁だけの無機質の空間をフィールドとして、我々は実に多くのことを学ぶ。展示の技術だけでは

ない。自らが手懸けた展覧会を自己評価し、反省することによって、新たな構想も生まれてくる。体験を通して学んだものをベースに探求を深め、そこに独創性のある新しい発見を導き出し、体系化していく。これこそ研究というものである。前号で述べたが、民博の研究テーマは民族学、文化人類学である。これは美学・美術史に該当するが、我々はもう一つ、博物館学という大きなテーマを持っていることを忘れてはならない。そして、この博物館学こそ「机上の研究」ともなることなく、各自がフィールドに出て研究していくべきテーマであるといえるだろう。

(鈴木正実)

近況

心境

◇近ごろ、イスがきしむようになった。まあ体重のせいだけではないだろう。どんなに頑丈なイスも、五年もつかえば油も切れる。そう考えてとりあえず、ワイプロ機の前にあるイスと取り替えることにした。そういえば先日、函館のNHKに行ったら事務機が一新していた。二十年ぶりに替えたのだという。函館も二十年ごとに机を替えるなら、あと十五年先になる。どうも目先の仕事に追われる毎日、函館二十年など想像つかない。それでも、小学校の団体観覧でぞろぞろと展示室をあるく子供たちが、今度は、子供の手を引

いて見に来てくれるだろうか、などとオリエンテーションをしながら思うのだが。

(五十嵐聡美)

◇職場の行き帰りが楽しいこのごろです。行きは、育児から一時はなれられる開放感と仕事に臨む充実感があります。帰りはそろそろ恋しくなってきた子供の口の開いた顔等思い浮かんで、エヘと笑ってしまいます。復帰当初はただただ疲れ、病気がかりして不安でしたが、最近はずっと回復。ここまでこれたのも周囲の理解と協力があってのことと、つくづく感じると同時に、一人でも多くの働く女性が子供をもつてほしい、またそれができるような体制づくりが進むよう希望しています。何にしても自分が「生んでからダメになつたね」といわれないよう気を引き締めていかなければと思います。

(吉名直子)

蛇足 寸

△各館便りの原稿をいただいたのに、この号がでる頃にはすでに帯広美術館は開館した後になっていよう。不手際おわびするとともに、せめて当日は最高の十勝晴れになることを祈る。△「談論」は、まさに美術館人による美術館を考える内容であった。発券、監視は、美術館の最前線の業務といえる。来館者との接触がいかに重要、かつ困難をともしなう仕事を改めて理解してもらいたく、ぜひ、別添のマニュアルを一読してほしい。△今回よりページを倍にしたが、多忙のなか、皆さんに原稿をお願いするのも恐縮であり、三月に一度の発行としたい。△この場を借りて事務局よりお伝えしたい。道美学芸研の総会を十二月の上旬に予定している。充実した研究・協議の内容を検討中。